

# 閑人閑話

KANJIN KANWA

伊藤礼

第十六話 農場物語⑬ ウドンコ病

イラスト・高尾 斉

さて、七月。梅雨時、わが農場の様子はどうか。第一に報告すべきは、やはりクワイ池のことである。

クワイの草丈はさらに伸びて三尺に達している。株も大きくしつかり池中に根をおろして、一株を構成する茎の数は十本をかぞえるまでになっている。生育順調である。

地下茎も鉛筆より太いものが何本も水中に走っているのが見える。狭いプラスチック池なので地下茎は伸びていこうにも先が支えているから、仕方なく背中をアーチ形に泥の上にせりあげてくる。当農場は地上もそうだが、池の中もギチギチなのだ。二DKで子供を

たくさん育てているようなものだ。それでも、去年は池の壁に押し付けられて片側が平らに変形しながらもクワイはできた。涙ぐましくも嬉しいことだった。今年はどういうことになるだろう。ああ、しかしクワイたちにもっと広い世界を与えてやりたいものだ。来年は奮起して庭に池を掘ろうか。

ちいさなプラスチック池ではあるが、先日、シオカラトンボが一匹やって来て池に突っ立っていた棒の天辺に羽根を休めた。水辺を求めたのであれば二キロメートル飛んで行けば井の頭公園の広大な池に行くこともできるのに、よりによって住宅地の中のわたくしの

プラスチックの池に休憩の白羽の矢を立ててくれたのだ。嬉しいことだ。

シオカラトンボは翌日も、またその翌日もやって来た。そしてさらに感動的にも、三日目に来たときには女友達ムギワラトンボとオツナガリの形の二機編隊で現れた。そしてプラスチック池の上空をオツナガリ状態でしたらしく飛行してどこかに去って行った。四日目、彼らはまた現れた。今回は二匹とも単独飛行だった。そうしてムギワラトンボが単独で降下してきて、池の水面をおおよそ五十回尻尾で撫でたのである。産卵である。そのあいだ、シオカラトンボはムギワラトンボのおおよそ五十センチ上空にピタリと停止し、空中ホバーリングをして周辺を監視していた。ムギワラ女は水面を丹念に撫でたあと、シオカラ氏となかよくどこかに飛び去った。

ああ、わたくしの池に遠からず、可愛いヤゴが現れるであろう。そして来年はわが池からトンボが飛び立つのだ。

プラスチック池の報告には、当然、前々回に報告したメダカ投入のその後のことも記さねばならない。

メダカを投入したあと、わたくしは毎日数回、池の傍らにしゃがみこんで彼らの活動を観察した。メダカはよく働いてくれて、目的のポウフラ撃滅は日ならずして達成され、メダカのために支払った費用は回収され、この件は落着いたのだが、それとは別にわたくしは彼らを見ながら次のようなことを考えたのである。クワイ池は昨年の経験によると、盛夏にときどき水が干上がってしまう。心して水道の水を補給はしていたが、どうしても何度か干上がった。真夏、かんかん照りの日、クワイが盛大に水を吸い上げるから、朝、補給しても夕方には泥の表面にわずかに水が残るぐらいになる。ほとんど無くなることもある。去年はそれでもよかった。しかし、今年はずい。メダカがいるからだ。梅雨が明ける前にメダカを避難させなければいけない。

そう考えたのだ。それで昨年クワイ栽培に使用した二尺四方のがつちりしたプラスチックの箱を持ち出してきて、メダカを移すことにした。わたくしは箱の底に玉石を並べ土も少し入れ、水を満たし、いっしょに買ってきたキンギョ藻とホテイアオイを移した。それからメダカを引っ越しさせようとした。ところがここ